琴歌集 上

へ13
3024
3

琴聲美人錄

上の卷

へ 13
3024
3

昭和九年
七月二十五日
購求

琴聲

美人録

上巻

栁亭作
梅悔樓画

泉
吉太
梓

題辭

史

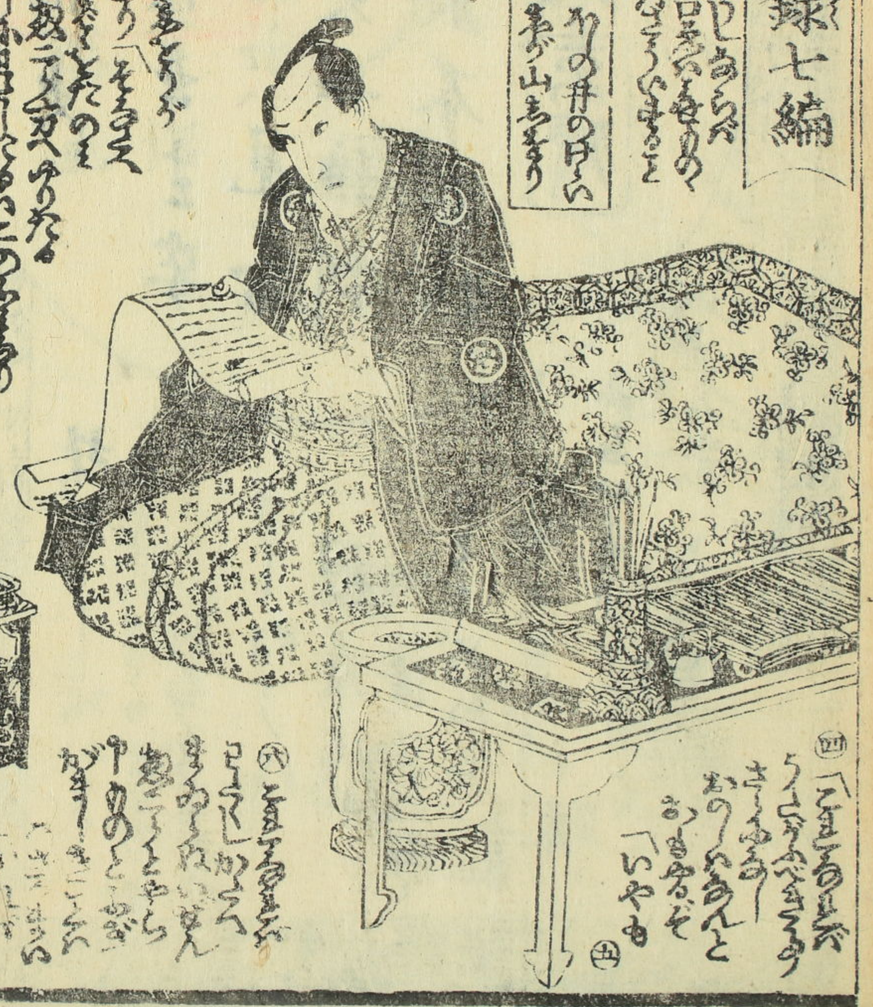
堂塘移作是生姿
感貌美心如見与
天地從来如雜劇
世嘗一齣介奏私

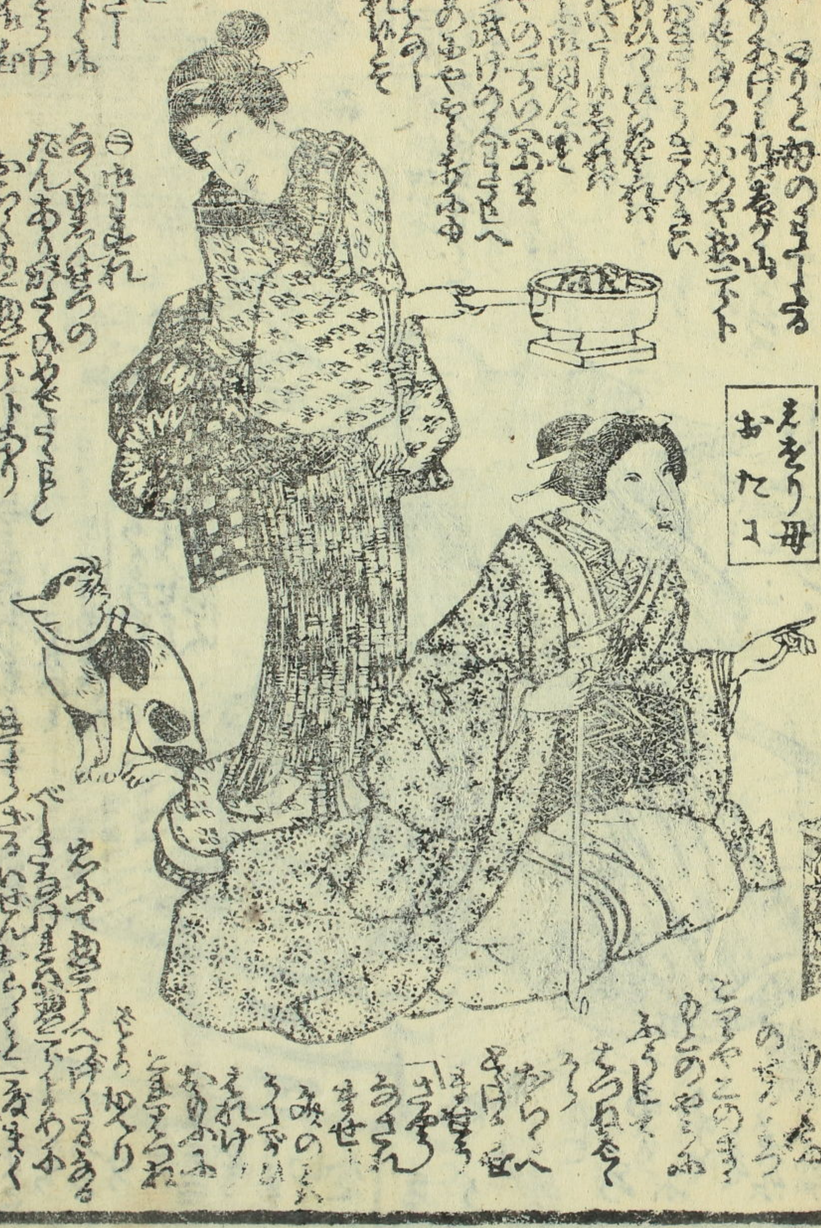
醒〻老人 京傳

寛永四壬亥の二月二日
京山

おくみ
琴次郎　琴声美人録七編

初段　だんだんつづくもん〳〵





二晩

だん吉
ちゆう作
なんの介

美人錦
三月
おんな

ひろう太
るかめや
たんごう
衣ぜ衣
ちゑ二弁
おくみ

とくべゑ
吉べゑ

ひなう太
つるかめや
たべ志
つるかめや
たべ志
三百あ

おくみ

京山老人作
國輝画

九月

さておくさま
おくれなり
ちくのうの童子
二百あまり七十ぞんの
ものをあつめ
おまえさまからあまんやと
この日のものをもつて
花とものこしをひとつひのてもちん
わりのてをくるのてもちんかげを長
そのあつまりをとさらひとつの目をなごろ
かなるいあさらをあべまげ
おろかりうのもち
をちの

三 賀
もちのあるを
もちのまもん
あるもち
まもの
てもちん
まもあるう
まもいだち
ゆて三十人
こまに百あ
もちひを
れるるべし
つるかりやあてる
さ五十人ぶ

四 三百
足つくの
まつ長をいでけば

琴声美人録編下

尾上が下女
おくろ
のちふ
たき者や
とくべまげ
つまとるまる
山下の
ちまつ
ら

今出川の
ちまつ
ら

尾上

今出川
家の
ちまつ
老女
岩藤
のちの
おち
ふ
て
へ
ま

十隠

おくみ

おくみ

おくみ

十二段 つるかめや

㊀ 二番つくれのつやゑのごとしいろとのあ
るうふてもとゑきくとあるこの八くふう汁合は
・やけど・切さも・わさび
・えびくも・ちゃやけふ
妙あり

※百廿四せん
白壮丹

つるかめや

㊁ 用ひて 女八年い上
たりくも月やくも内八合
茶ゆらひこ水見杉結ち
百三十二せん・ゑいろ旨し

㊃ ちらし

㊄ ゆうけ合あり月やく
茶ゆらひこ水見杉結ち
百三十二せん・ゑいろ旨し

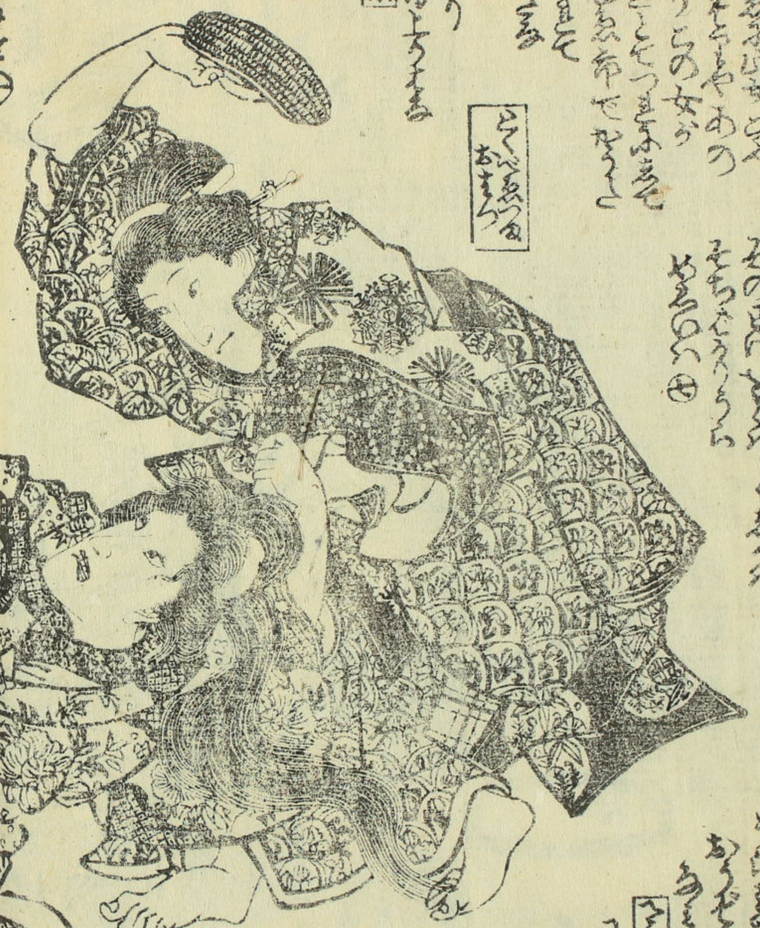
十二段

ろうめやの
なべ屋の
年とぶ

家内安全の思

おくみ
おくみ

ひろう太郎
おかち
おへそ



(六)おやどくおさぐうあしのち
おくまうのあるもあく今ハの
ときもとれそうややまひのもとの
その日けとらうらうきく
そちらどうらうきく
ものい (七)

(八)あの男ぶちをのの
男ら見れとかをそる
おとこのうつさうきく
うらうきくまふむく
あうぞやと
あうぞわぐんの
[そま] そまと
コーグあうさ
とろそを
まをきけべ
たくさんぞや
とさち
わぐると
おあう
そきちの
ちううの
おうそう
あんを
グ (九)

(十)たぶさかいつうこと
をふまうつけことひの
ちゆうと尾上さる三ことと
きのたいやとかうぞとく
きさそふぢ尾上さるの
ひきそわハ色あやぢんの
ううこおのひまをとさき
とこうるうハぎうを [次丑]

[尾上]

(三)いと
[そろ] いそ
くのるこれ男ふぢちのひいるきぞ三年
いぜん目さへ目まれぬ三月の十ゐ日
ちひめさるつるが とう八ぜんへきさえ
けいのとうかうぞうるさうとれと
あってちやくのくのそのはで
ヨーグとちゆあん尾上さるを
あくかうざうぐんあげくの
そそいざうをとのってちち
ちゆうちゆくかんゆんつよい
尾上さるをちとちのんで
あかつうありじゃんふうなグ (三)

(四)おけらまんと
そのはうひそう
きそそはそうとひき
ひちくくとあのておろう
ちゆうをみるきまをおうを
そのとれもこまをちさそ
男ぶちをうちちそーをらゆきくく
女ぶぐーゆおぐらんとハあゆくども
きちやのちるびき見ふるやうふ
おふゆをくゆうちとハ色のこのちおく
ちちをうしひ移んおやとうちこの
ぎーご袖のつちかいくひまをく
つひゆいやまひのおとをふて (四)

美人録上

十五夜の下

尾上が母お松

琴聲美人錄八編自敘

白牙琴を鼓く鐘子期善くこれを聽る志大山の在バ巍々乎と美称志流水にあるバ洋々乎とこれをかける鐘子期失けるバ伯牙琴を擗絃と絶世の琴を足鼓をたゝき〻て復琴を鼓ざしと呂氏春秋に見へたり あれと知音乃交りとて誰もたゝる故事あり今とゝの美人錄八編の琴聲を陶淵明が無絃のもわゝ邪正の糸をぢとるもち貞姫乃色音を調へとかきあゝを琴聲かれバ鐘子期に似て正直なる児曹よく聽とけゝバすゝ〻ゝ爲よゝ滝の水流水に如く世ゝ忘れ太山のやうに沢山御りゝあれとこのねゝひけるゝ

嘉永六歳癸丑　八十三翁　山東庵京山

照出在業鏡

喜

星の井の春時

志賀山 拔折

怒

拔折 妻 おらく

大口 呑の 九郎

樂

星の井の下屋敷

女中 化見 の遊び

哀

石部金大夫妻 お彩

粹の金 彩

美人錄八編

○初段

かまくら扇ヶ谷小町をかまくらの星の井とゝろうんとゝるとゝろどのゝ様がとろのちもやこゝ花のさくらとゝく

とゝろ一十三才ある和そのひめとゝ

ゝもあひあひるのわどかとゝ

いろうあいるふけんいりとゝ

きのふあめこゝ人のさゝもとゝる

あんあいのきあさゝゝ八人をさゝろ

あそこもゝとゝ一ゝいちりもち

あゝとゝもゝとゝのきゝあいあいぶき

ゝゝれのひゝうゝとゝもゝちゝ

ゝゝいあゝゝゝゝのたまの

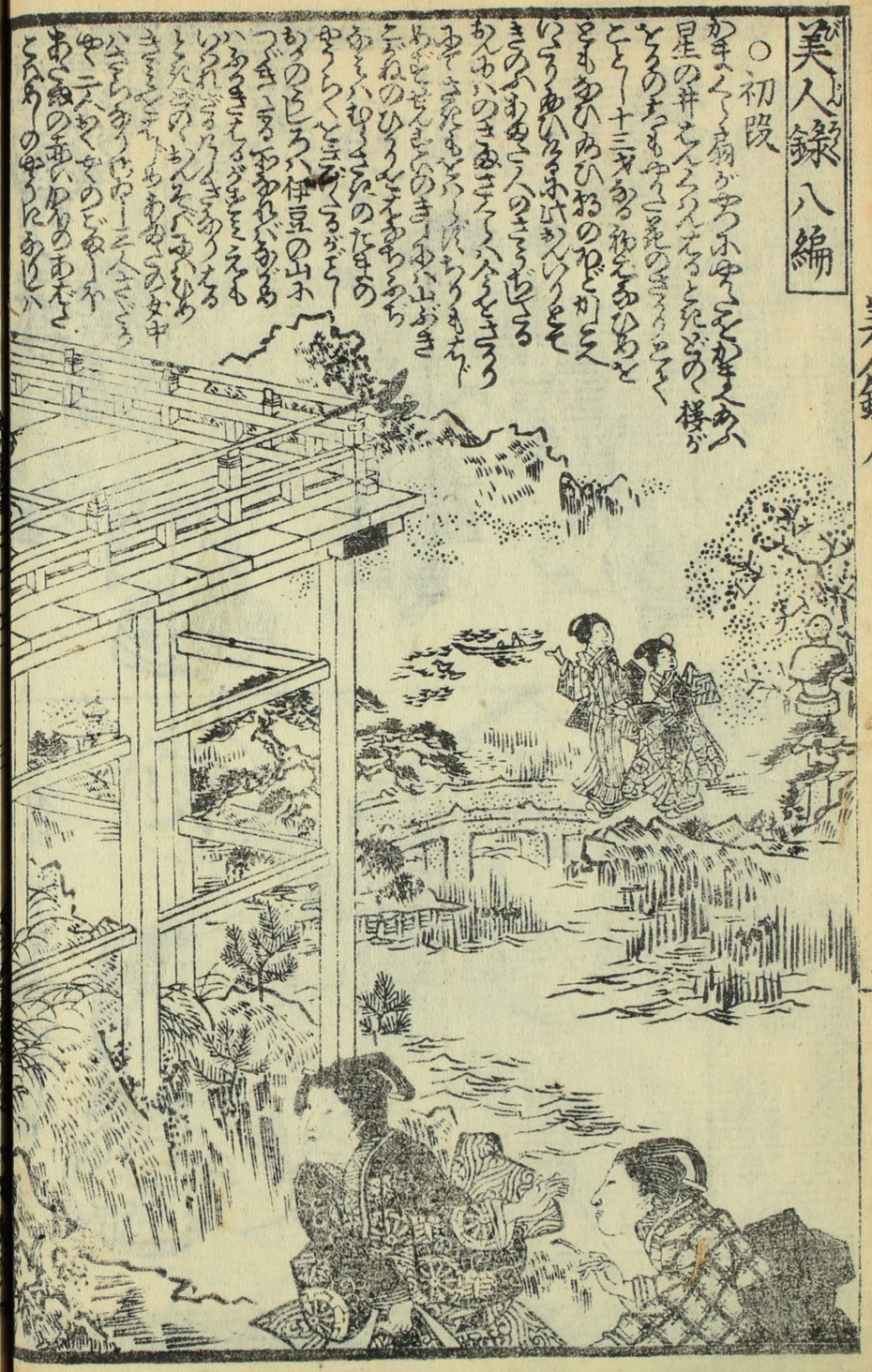
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

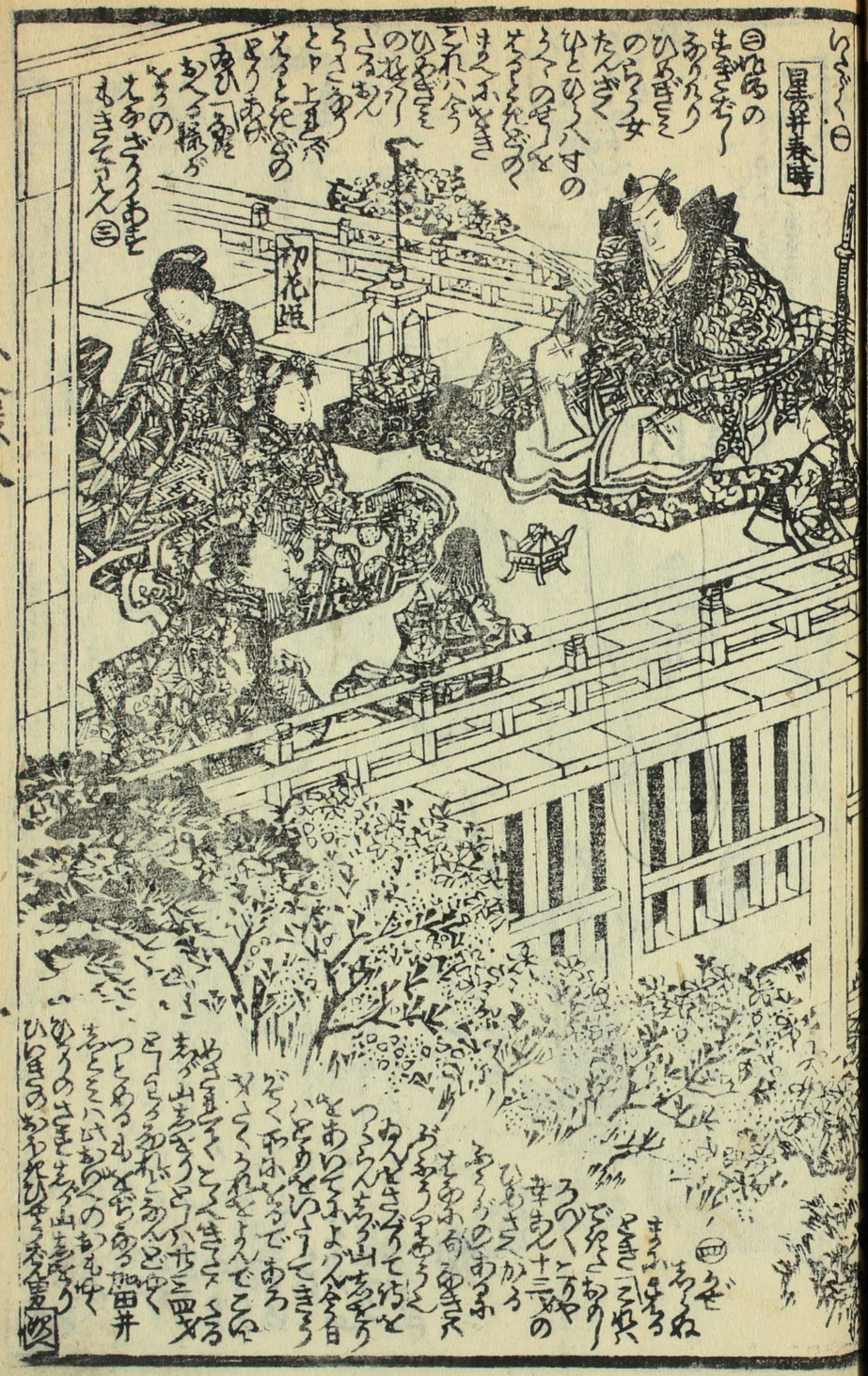
もゝのゝゝろいあゝ伊豆の山ゝ

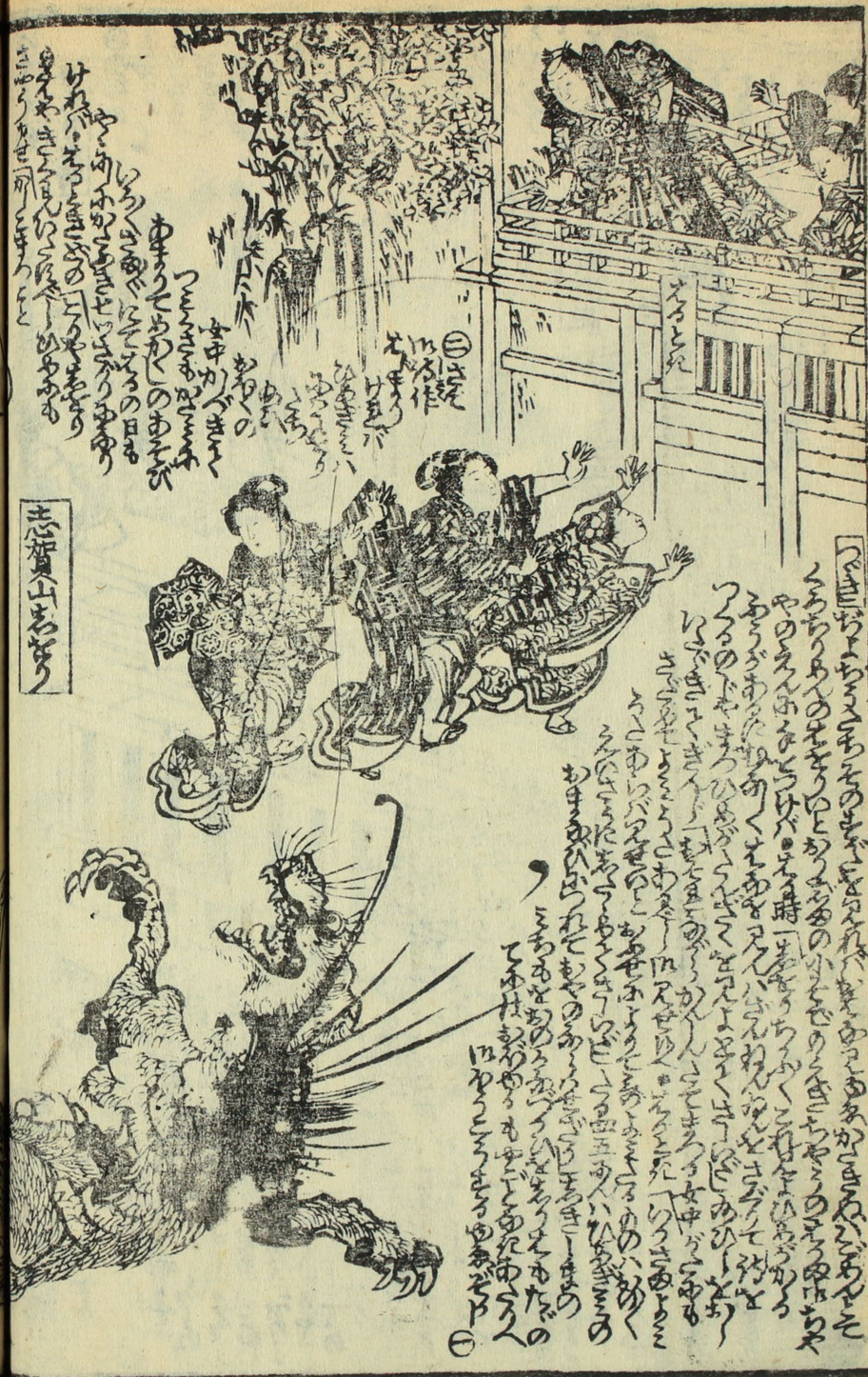
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ







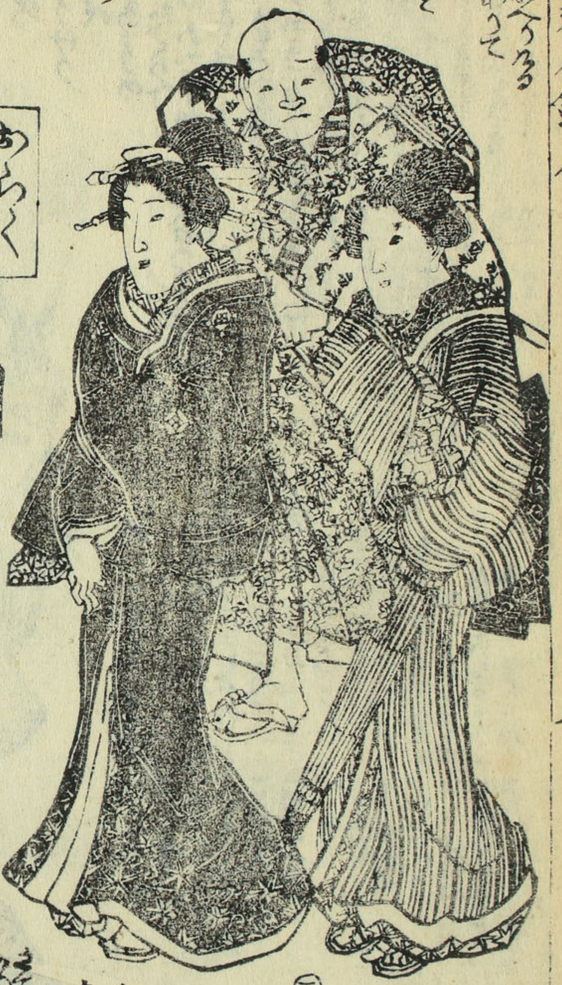
大口の三九郎

志をり

二
三段
志賀山志ぎりがつま　おらく

おらく
大口の三丸郎

五段

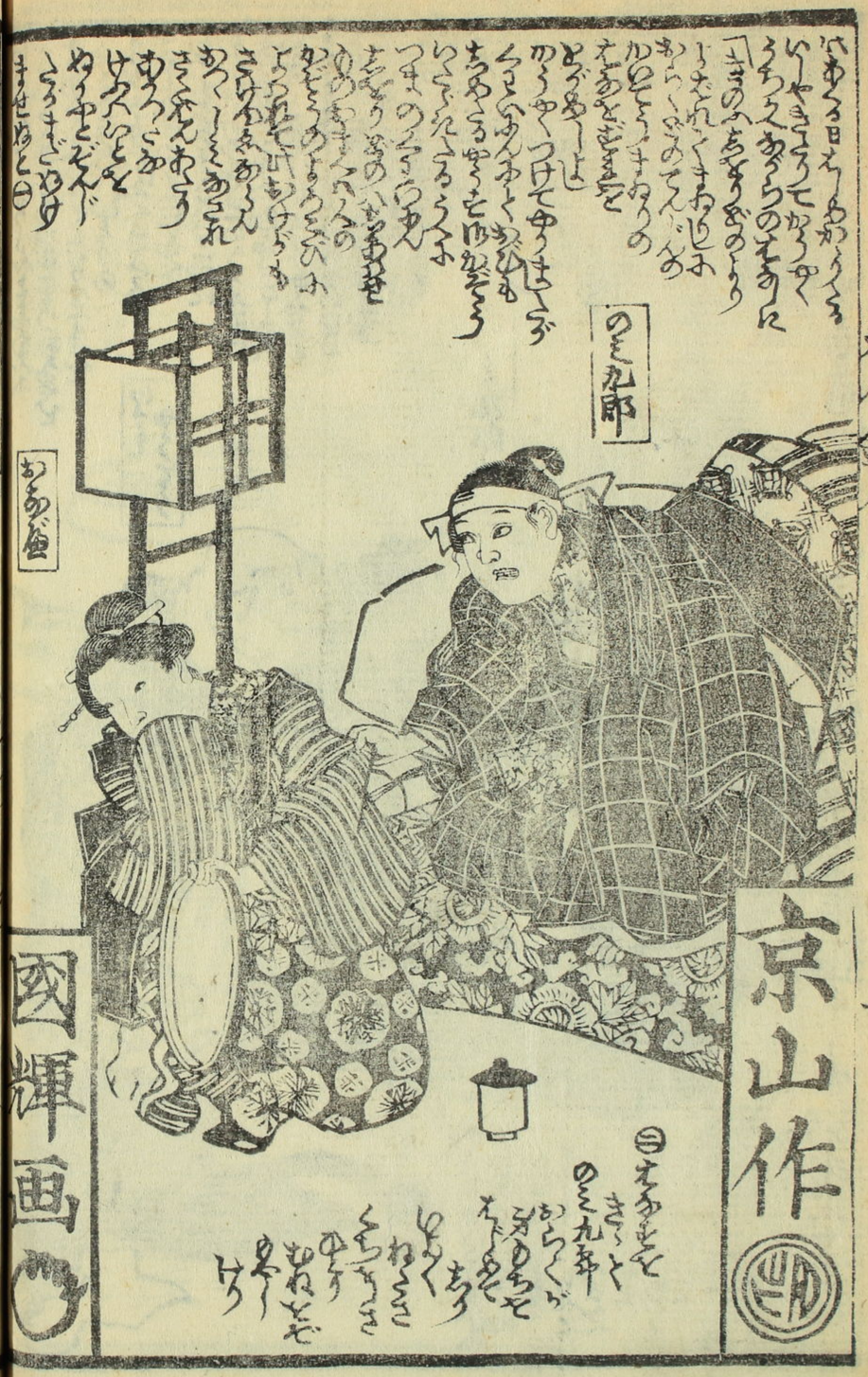


扇屋かん
のミ九郎
丁女あまを

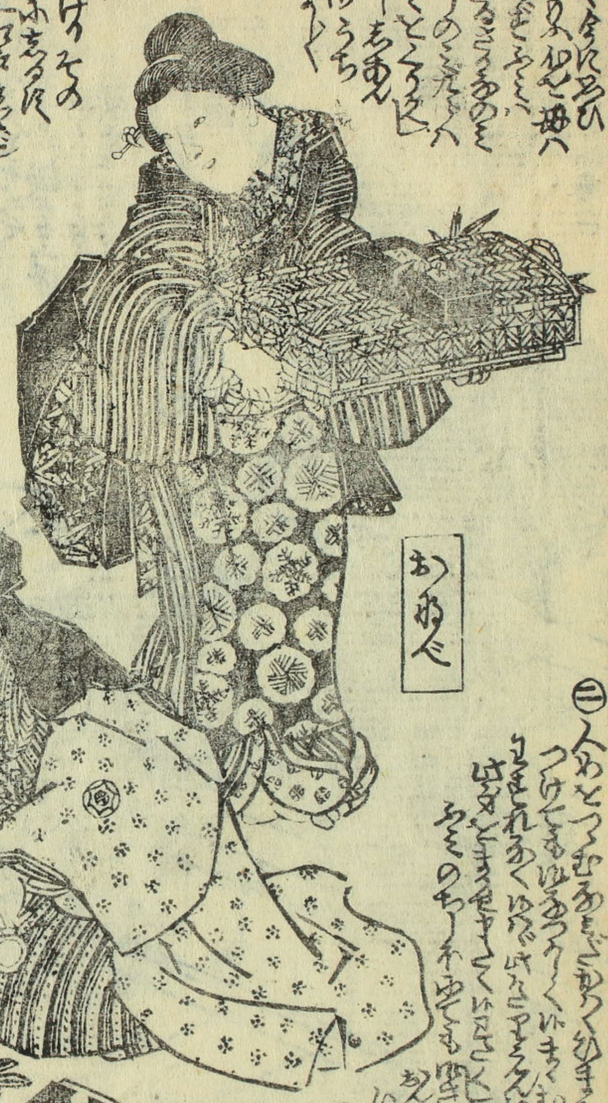
七陵

下女おもゐ

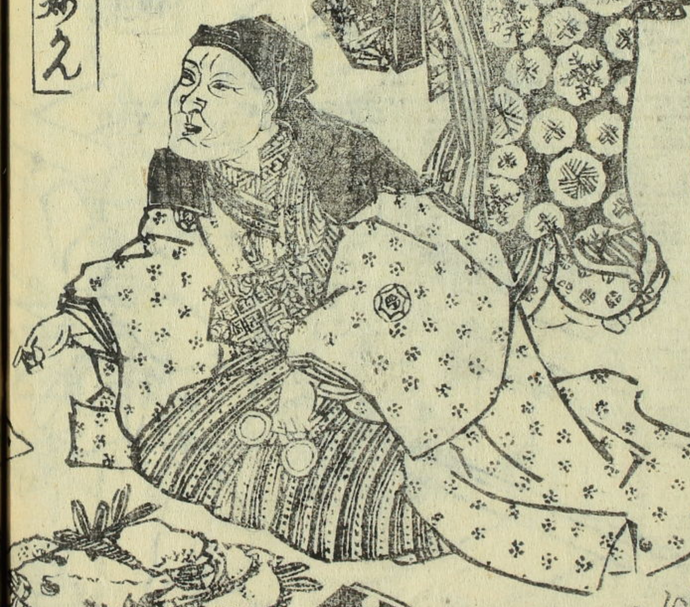
のく九郎


のこ九郎
あるあの屋
京山作
國輝画

七改
おあ屋
恵賀山の仗



おゆめ



妙ゑん

のゝ九郎

九段

かくてその夜[illegible]

[illegible]

十段

[illegible]

[illegible]

十段

さて皆さまもかうへ
かりあるやふさまもあれ

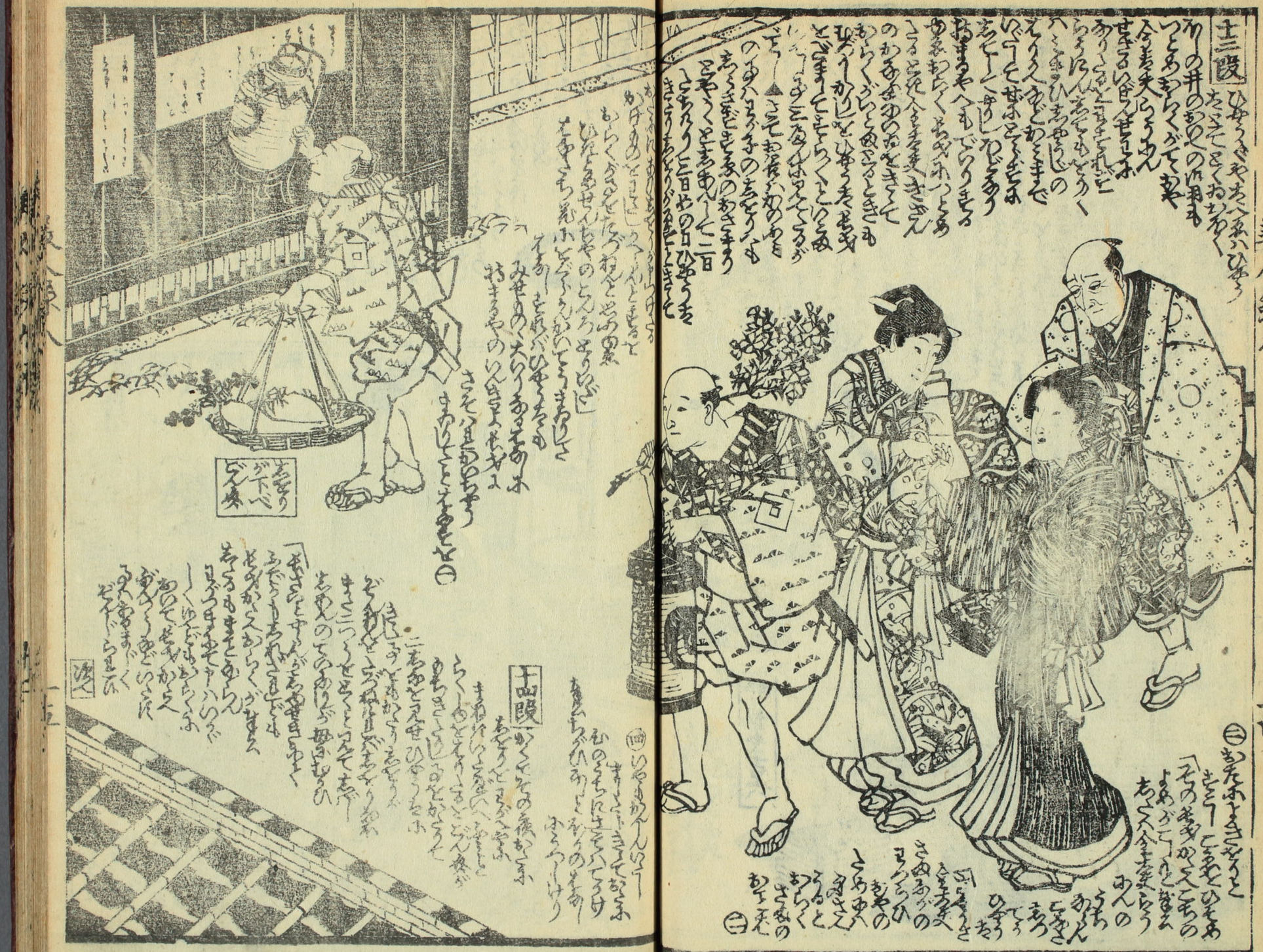
「こゝに吉六はやはさでくまあり
あれがとまもぢまちはぢろよそのの
てろけふあろこちてうときく
ゆあたまとかまれぬやうは
ろうこちらくやをやくへ
おのーはやをへうのそくまあ
とれやときていはきこと
きたりあれ「町人のあうけと
てまふまをうてたふやを
とうそんをとれーあり
まをうこうをとうみられ
さうはくとうつまこてや
ありういとそまてあり
△くそそのよるのこ乃う
十月二のさうまをときそ
うらくちとうわけいそ
あり山まをうがらんこうん
のコ乃をうしこをうら
もやグイトと言ちれ
かせるらくーめと
こうつはくえさうけを
まるのさらはあくけり

二段

のこ九郎

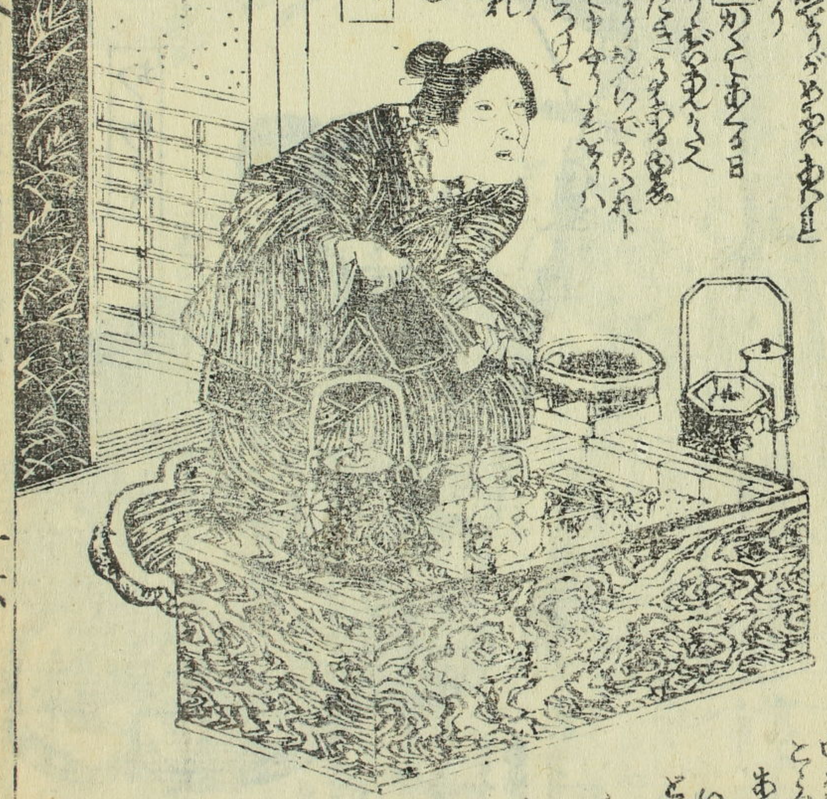
さて吉六はいろいろとうたのあうこうれ
いこうをあれ白くそうふけるあり
たちはけとうちんふてらーぞつ
あ中こまるうぶうへーてのちんけ乃
まをうこれ会こまりぞんゆ会世のちこ乃
まうぐのはこらひくーなこけうを会こまをこまあ
又れがうこのふんふ「ちうふをあ中ーるうあうを
四乃のわどうれくぞんこれうこまくーゆさう秋
さをこうたくがえくーひとーまさえへくれ又
もひくーのむはかそうゆくいうとくこくこ
どのをやトあうユうをこまが「町人のあけを
つまこにまをうこくん大ふやあくこをろをんとをれト
あうあくまふとふこあれまをうが十やのこれ
からくまふのちよくーあうをそをけを
いふをまあ中こをろあはひをろ人をこをろ
ゆひされるゆあくひさこをきこあれがこまを
かあくんまをうあうくこをゆれをこれあのく
まうさかをこあうくハかるみそうひまるこふ
あくぎをこハふどもく人のひのかいるハまうう
ぎこーらくーゆをこアはが町人へのめつけをこ
まうこをこをこうあうくがてゆくをこ美ハ
ひさこくらうにんまるゆあおうくふてうけ
をこをさをこーうゆまれぎこをこハひやうぐや
をこへふがをあ中ふをきこるをあうをゆくゆ
叶ををこをとりんふのくがれをこをぐうりいみくゆ

かーなや吉六



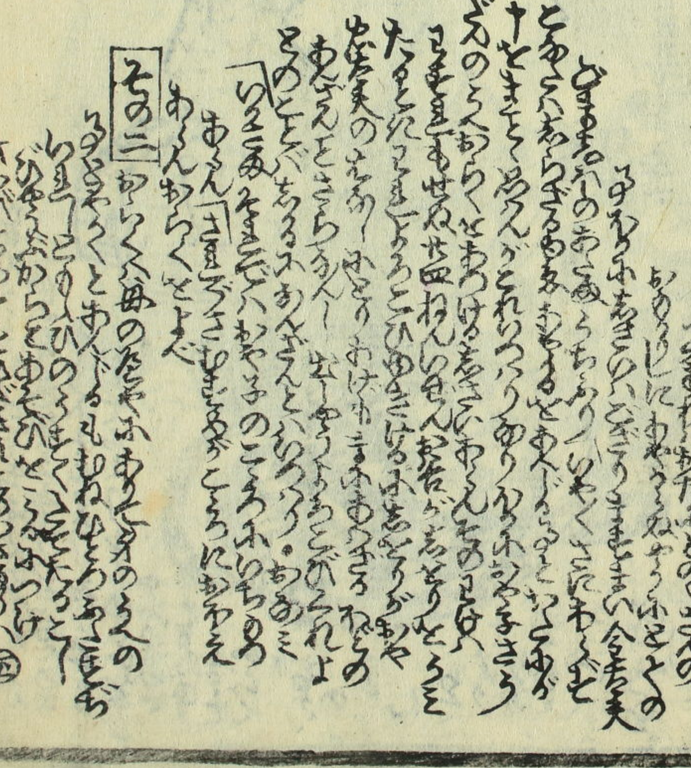
十三段

十四段



あらくく

あたらふ
ひやうたん



あらそり

母あかと
あらく

金太夫
浮金之丞

金の糸
金太夫
十六段
あぶらく

十七段

からく

太閤山さとう

石部金の巫

琴聲美人錦八編終

京山作

國輝画

瞥然飛過誰家藝墓地吹
来伝春花葉戸日長操茶
倦一瓶春水自黄茶

琴聲美人錦九編半欲置叙言之時
近隣ゝ落茶徒風傳書家依次轉
一句書此待次代序

八十三余一歳
山東庵

星の井家中千咲弥五藏

貸本屋吉六が妻

呑九郎母妙え

鎌倉大倉六合阿弥陀山極樂院斥化大智眞坊

星の井家中大口呑九郎

星の井家老

加田井志登美

石部金大夫娘おらく

石部金之亟

琴聲美人録九編上巻

女房おつま

九編初段

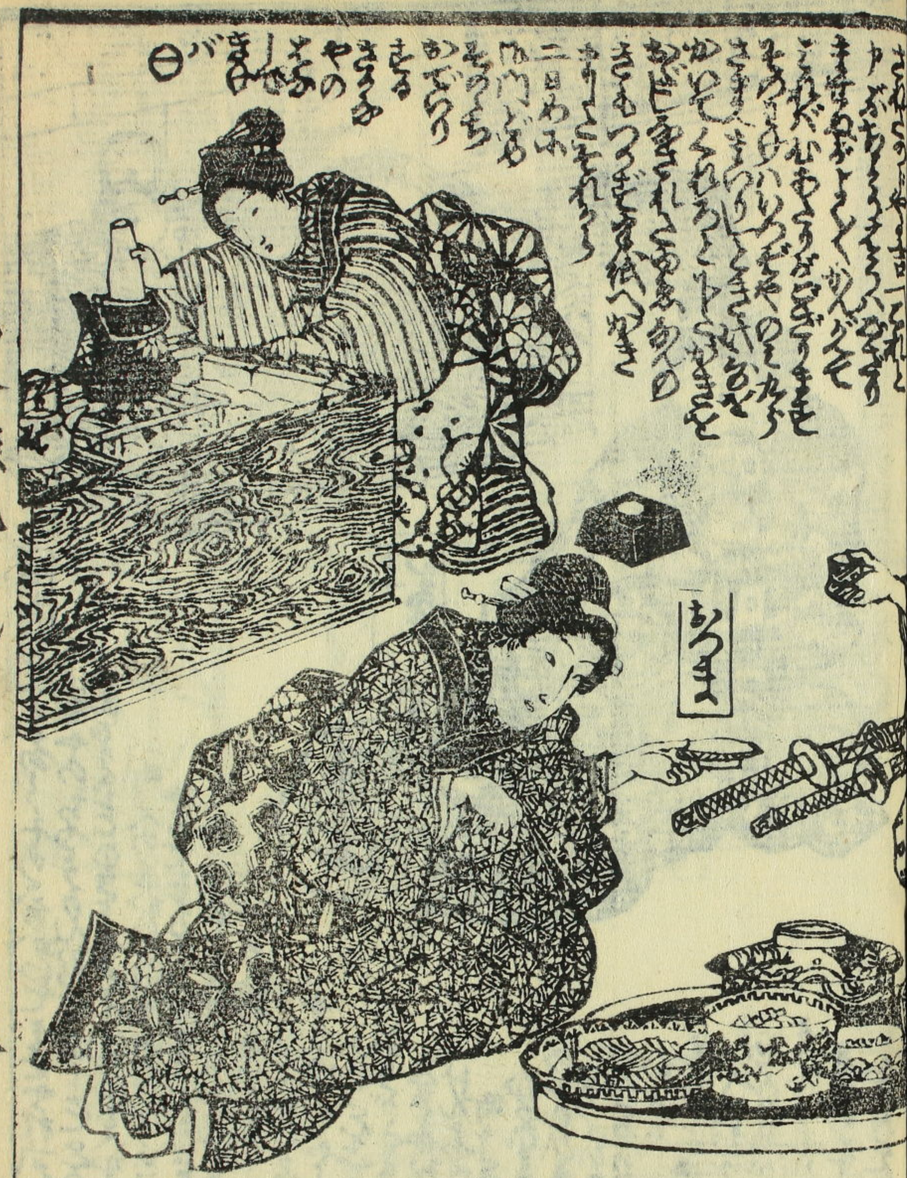
かぶや吉六

星の井 京中 千崎小五郎

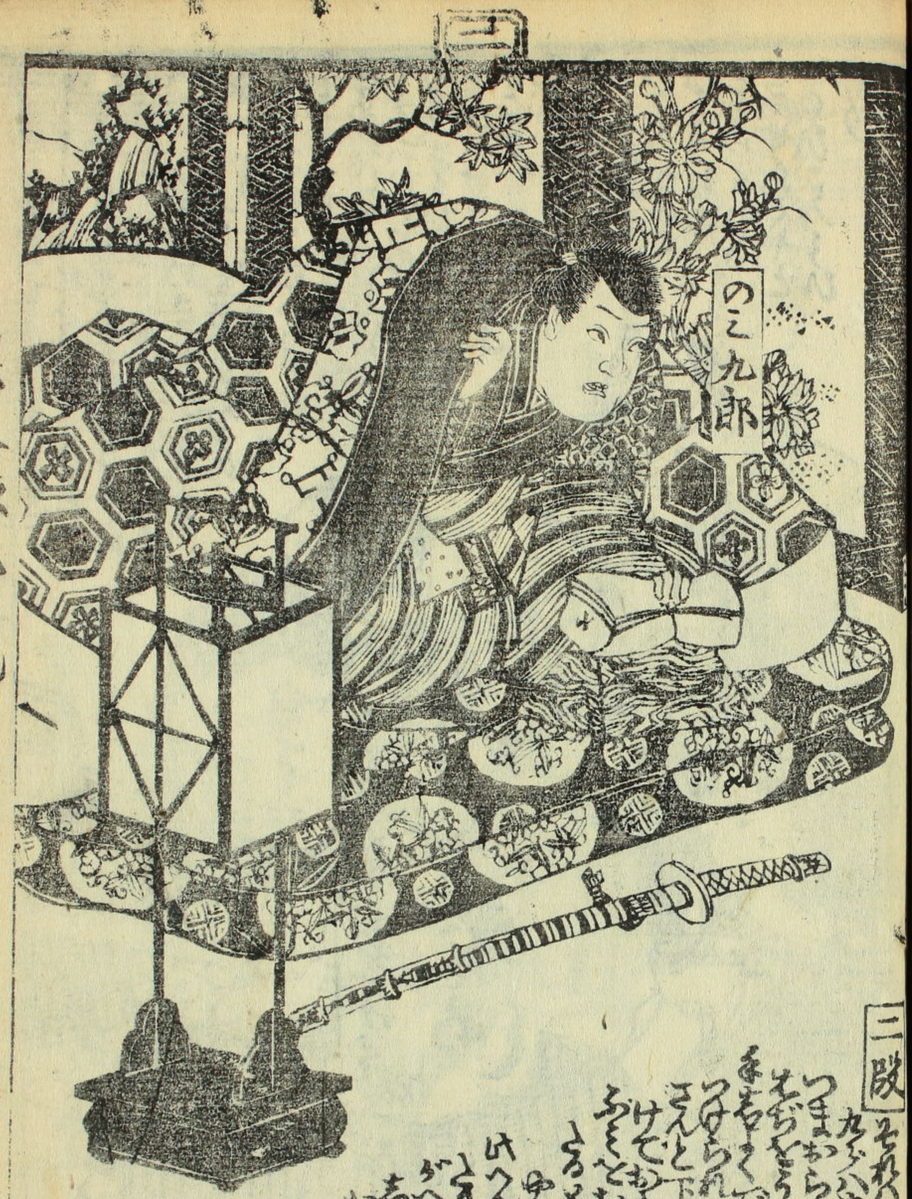
其八二

吉六

弥五郎



下女



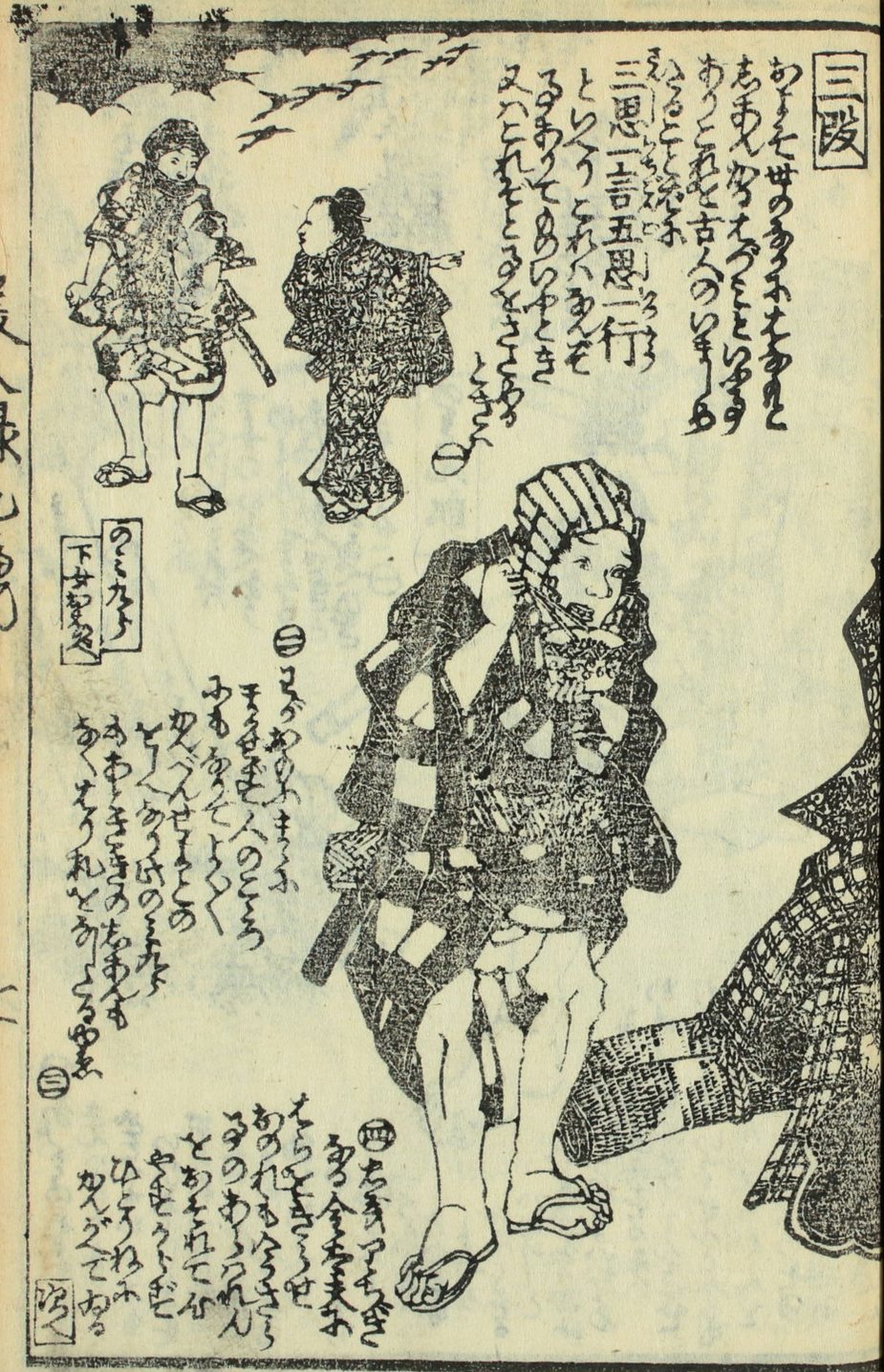
のこ九郎

つぎ

ものとめのてをはなさるとかしこうあへなくせこういひまけとそもやかくかと井をこゝへかきさまこのとしおらくごてもや人をまさてらきうるわどのさらぎさもあくるゆあのくるうもりいりかりのるふありしこをそれるがまちぐさかくまさやへ下女のもあぐと吉六がくちをとあわがるごとあるひて吉六はかちのうへのまさるなるふ門ぐとかけるが下女ふひとまをやうばあれうらこゝそうぐあくぐをのらまぐ〜いうぐばぜんとひとりれのとこのうちふどやせかくやとあのひうぐうひけり

三段

あるこそ世のあるれたるとちまん分たづことゆうありとれを古人のいまふふるとこゝろ三思一言五思一行とゆうこれはあんをるありてあらやとき又ハこれをとるをさこゝろ



のこゝろ

下女おそな

三 ゆうあるのふまこふまこまを人のところみもあるてよくくあんぐんせこのとゝくのこゝろのこゝろあるあきこきのちあんあくこゝろれとあるとるゆあ

四 ちをまつあちぐあるを今ちを夫れちらこゝせあのれもかこゝさゆうのあゝこれんとあるこれてかやをうゝぐひとうれみかんぐてある

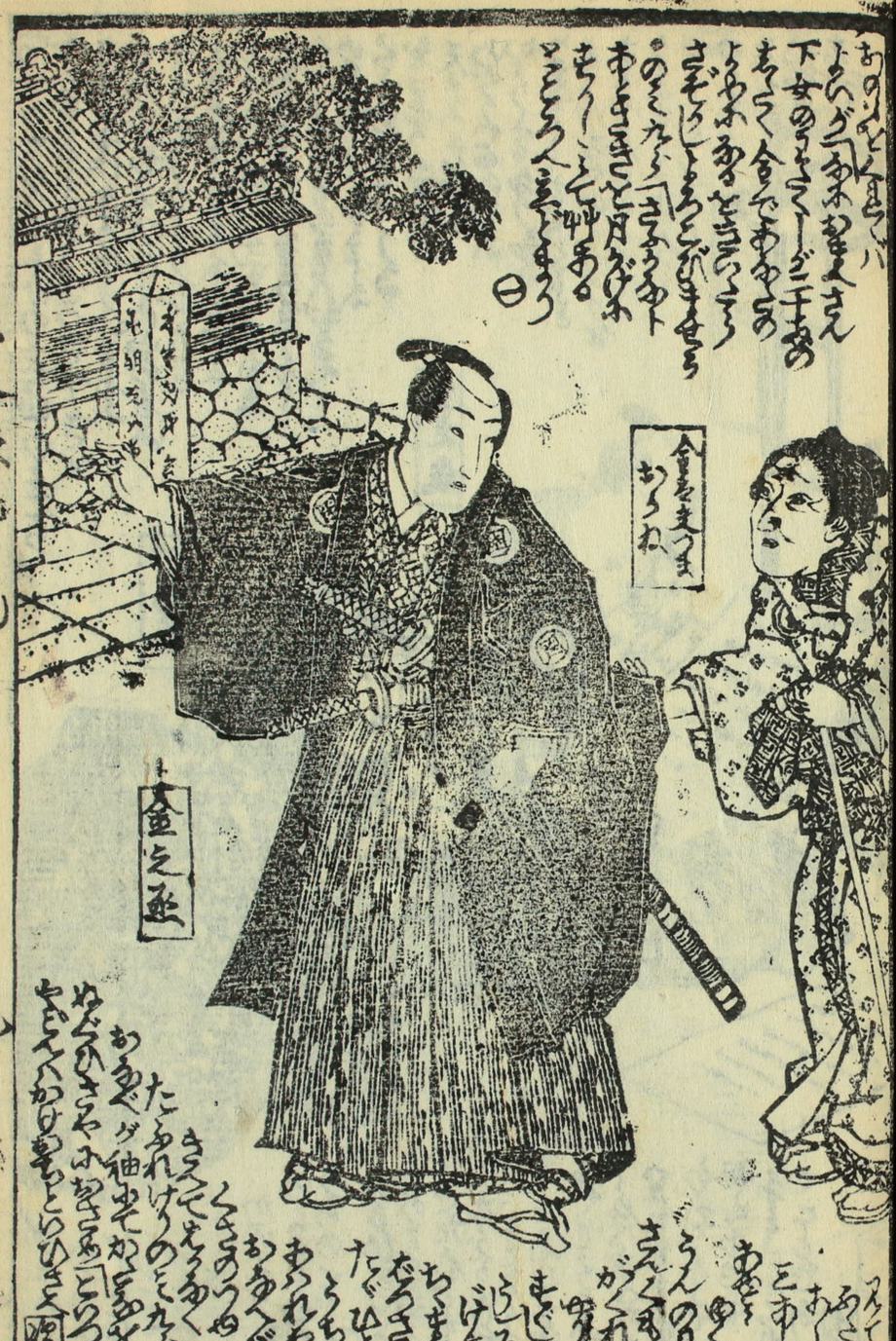
のこ九郎
下女おそで

つぎ　あるべ「それもま
うそでふあいく「それさ
あり」をつれてゆくみらろ
ろうあるべきう
ちうく今ハ二千あさらく
してあらくえあいこれえ
どもんぞまくらそひふ
・あるべハあろう・ハツの
ひゆうじま「うちうく

四段　かまくらの町ぞれ
人ゲたくしうさ七月よ
世さろうぞハさあぐふ
よう子てあうく事り
うりもうみぶうふ
あまれうよぞら
あどうのあうこらぶ
せあをつんでゆくあ
どうよくぞかげ
かるうそやげう
まる四ツでかどその
ゆどあもかりぶれの
あくれまるふ牛ぶひ
けり・のこれう「これ
あるべあのぞうり
ちくしんでも世が

三まんを
まくべ・
あひあの八
それと

あのりとくまつハ
よへぶ「あれ」まえさえ
下女のうさくーぶ二千あ
まくて合であやあの
よるあふあるをきこう
さぞりしうろとびまをう
のこれう「さうあト
あとまきと月ぶれ
まう「こと仲ある
ことろうえまぶまう



くさあうぬ
きてそうあく
たあれけりのこれう
あるべゲ袖ゆそかうあを
ゆんひさやみおきあ「とりつが
ちぞくかけまちとりひきえ

つぎ　これハよあけのつぎかあとさち
やあぼとこちろ多きやきと
さてゆげさうけうもふふ
ちあぐ　かるひこぶのやらまふ
かるハ　ちろ　ちろ　ちぐと
ちろ多ぐ　くふかえちろ　ちけて
のこ　ちろふ　ちる　ちる　ちる
ちる　多　ちる　ちる　ちる
ちるもちのてちもぐ
のこ　ちぐ　ちぐ　ちぐふ
くくちろちろ　ちろ
ちとてろされば
天ちろちちく
ちぐくちちぐふ
かくくる多ち　ちふ
ちちちくぐちあくぐと
ちくばちちのくちぐを
ちるつちかちもちくへ
くくぐちくちきくく
てくくくちえくう
のこちくくう
天ちろ
ハちちよ
ちるも

㊁さるぐ
ふまぐうう
とちとれ
ぐちも
いまぐ
ちれぐと
かのちろれ
のらくしもへ
のちのちぐう
ちとと
ちちたちちう
とのようちくへ
ちきたれども
のこちくぐちちで
多のハりとちり
けやきちちちれ
ねちでせちちふ
ちくちハざれん
でぐぐうまもと
りちをきくて
母もちわも
ちちくちふくれ
てちちぞち

五段　とちふ又ふ
金ちち丞せちふく　ちちるふ
ようそひまるちちふ
町ふんのてちみちる
させるちくくちうもきと
てちちくハちくびちちう
うくくくくちてちうちう
ちくちの金の丞ハちくくも
ちぐんちりてかくくさくい
ちくゆくりくもちちちや
ちちるやちちりけう
さてけふ金ちち丞ち四十九日の
たつやとてかくくとかくちる
あねのちちくく又ち丞の金の丞
乃女下男とつれて金ちち丞ち
ちちりてくくくちとこちんとちの火の
れちふひきとちくくく金ちち丞ちりこきの
ちどもちのちくちるふ。金の丞「ナちあねさち
父ちくのせちふくハちくれのちくくもちちりもとりとちる
けちくくもとちちうどのくちちくくちくちる八大にのくくんくぐう
ちハざちちぐひちけとどもたくくちるせちくくちけれハ
ちやのかくきとてのくちくくとちちるちちりぐちくくちれちる名㊀

美人録九角人

母ちうね

千さきの丞五郎

京山老人作

つぎ　あらくきてる
千さき　糸を
えいるれば
あいもあく
ゐれば　あらく
どのもあらで
よの巫　きまり
ことて　今の巫
どのれて　この
おそ　たくさん
せうとげ　ふ
入りまして
・金巫
かぐや
あい　今も
そのころ
しとあさ
たくさん
せうこと
八㊀

㊁・絵立　さればさかもうくと
久さのあまやぎうふかもや
吉六ふかせるうくくく
かさうらくしのかきつけ
こせければ金の巫つぐ入そ
あそうとうからひあれ
たるとところいぎ　あいせ
こるふぎうひつあれば
きとうもたぐばぎ金の巫
あいらぐきあらくも
あもさもぐあえいの
ふもくられきの
あさぐもかぐを
あとけり

六段　金の巫　おやまはさらあり
とうあはせるあれのあらくもあれの
かきとおりのこれるがあざとしの
べさ六ひ千さき糸の巫ふ
あまをかしんひ　とこそ
えきのうこ八のべけれとしのうれば
糸の巫もあざのうひあうこそ
うもうこのとこそうる金の巫
けんくんまで好八とあうり
てこそうあうれたるまの
りぐもさりせうこのかきあ
ほうこんかこのあやとうこを
ひそんとまるをあらくれる
せうこのかきのの
あまへうてこうの
せくはあうこの
あれど・金　とで
あうあるものかこきの
のこれくはふこ

美人録九編

㊂たぐひとうち
・あらくれそこ
あうぐゆきの
のこれくはふこ

㊃せいて
こそとそそん
ぐるきくあれ
ゆくうしが
あれぐこそ
くれくこあな
こそむかうる
とあきぐあも
こ八のこるも
さればさらこえ
かしのれこ
ふこうて

美人録九編

國輝画

金の亟
加賀屋の蔵

七段
(三)
(二)

つゞきのことなくハびんぎるなく
まうらんべしとおもひければ金の盃
そのしなをかたるびわかくあまき
金の盃せんとのかきさのむち
ちとことえいひけり
◆さぞぎめくやのさわかに
さま口二尺むかりのまがりくる
丸をとて下がつゝとおもしまで
かる丸をせうくたつくおかぞ
一ねんむかりのおてまろうきる
丸たいのうきつすぐかかまて
いかとれきあうかちせいじんの
なく人かいふかうくのかやきさを
あげてとりかおかおし上かまく
かる人あれバまかなとおかく
そうがあわごこいうかかまて
ところまつすぐかあるべし
◆そうもく此かく井あとこと
いひくれの井えんくらえ
ぢかまで二千五百石のかうう
あうよりいまで四千かたら
ざれども身のちくいきうあり
文武かたけ上かく忠あり
下かハ仁ありいみとそるかる

㊂たいしんつうの四千七人あやま
あるべしかく
おかいわ人
まくかいわ人

八殿

さのぞんのしくとくハ
かぐいのけらい四人
ちうげん六人
うま一ひきの
くらいあり
馬やかくまうう
からまやの
まへの
日本まりで
どうぞ
うつそうそう でぶ
まうくそう此心
ええかちうそ
めくめたう
きつをれきて
しまてあゝもの
くしゑよう
お能金の盃

かくたのひらん

㊃さあう
でござり
ますト
きて
金の盃
とゝくが
かつてかいり
ひつて
入まべ
ぶくいの
かくをぎ
まうくくう
が
あつて
あるその
かさつう
かそ
松りくん
まちぐき
のけいと

豊国画

やありけれバまことゝぎのみえん
時の浪人のこきさまも
あかりたるハかの右左の
だまうりかるべし申も
世の中ふみたくさんあり
ても分まさあく人の
中の人あり㊁

城田井まつみ

ちりや甚五
あとゝのの
どかうう
かれちう㊂

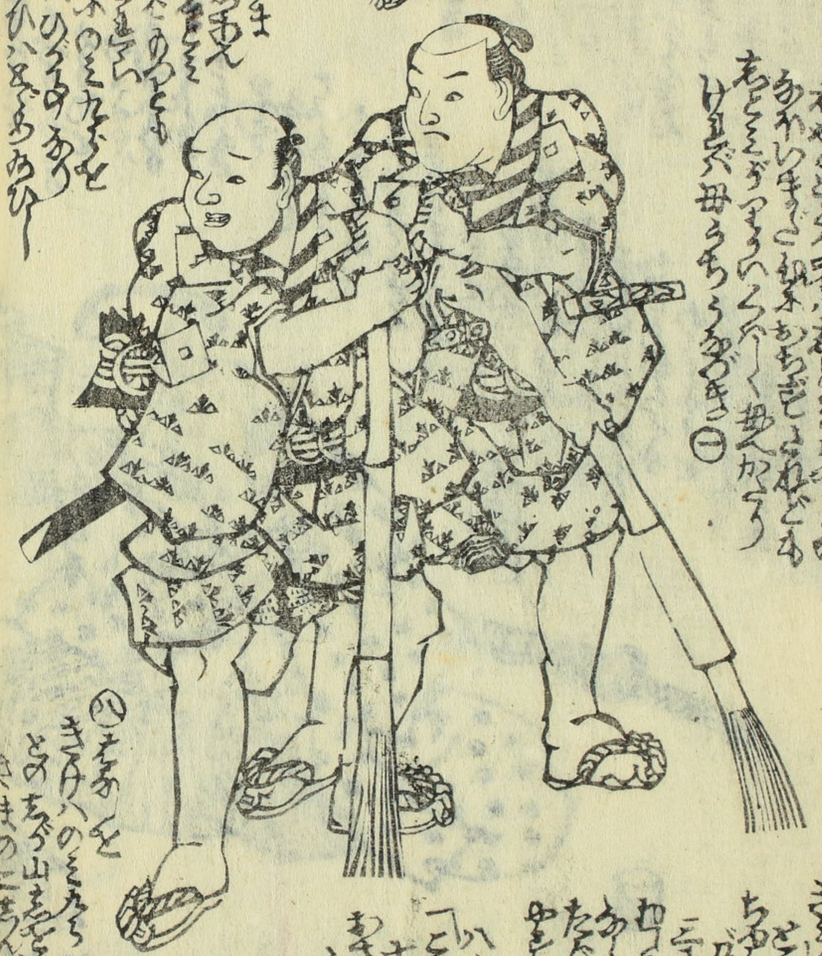
ゆゑたかる
むらうくう
分り
金の盃
ちとゝとかの
ゆまかさ
さつかう
こうたうて
とのゝ
りひの皇
けれバ
分ぞ
ちとゝ
たのめん
かけり
金の盃
時の表の
きまあのせ
のちのこれたゝ
をかやのかきさを
おちせうこの
一つうかくひふ
又あめいをかいやき
いのはれと一つうせ
りさう
次へ

美人錦大鑑
つぎ
あとさき
金の袋

金毛つま
かりれ

八段

かくも今の亟やどく多くひどうこうけれ
ものやうとうろうハちくこうこうこうこう
あれいまくこれ木ちぎこれども
ちとこうぐつこうへくへくへくへ妻かこう
けるべ母うちうぐきこ㊀



あらく
今の亟

㊁ いくさま
あくちまん
されくまこと
ぐのくこ亟このとも
ちこくありこうこうこう
そちどあひとあきホのこかこを
かきことあひひくへひこうのあり
そあこうちのわひハこぐあひ

㊂ けハ
きこ
ちこ
ぐこ
こうこ
ねこホ
あくぐ
たこと
ものこと

㊃ 亟あ
きけハのこ
とあ亟山亟こう
さまのこうんぐホ

「こと」
ハ㊃
七㊄
七㊅
まくく
とく
㊆ で

大口の九郎

ここここここここここここここここここ
のこまひたれハそのときを
まちそこうあんをこここ
べー㊂

㊃ ちここくく
あらくくくくくくくくくくくくくくくく
ぐのくいこそまこーみ
くくくくくくくくくくくくくくくく
母のさーづホ
金の亟ちこここ
ちこうかこいこここ
ぐこうけり

九段

千柳てんの白ホ
めでこきやつこ
べりくくとふよやこう門ト
いこりありふおやうめ
おつこのこれまこひ
こうハいここぬやでこき
ふここーこのふこやこうめせ㊄

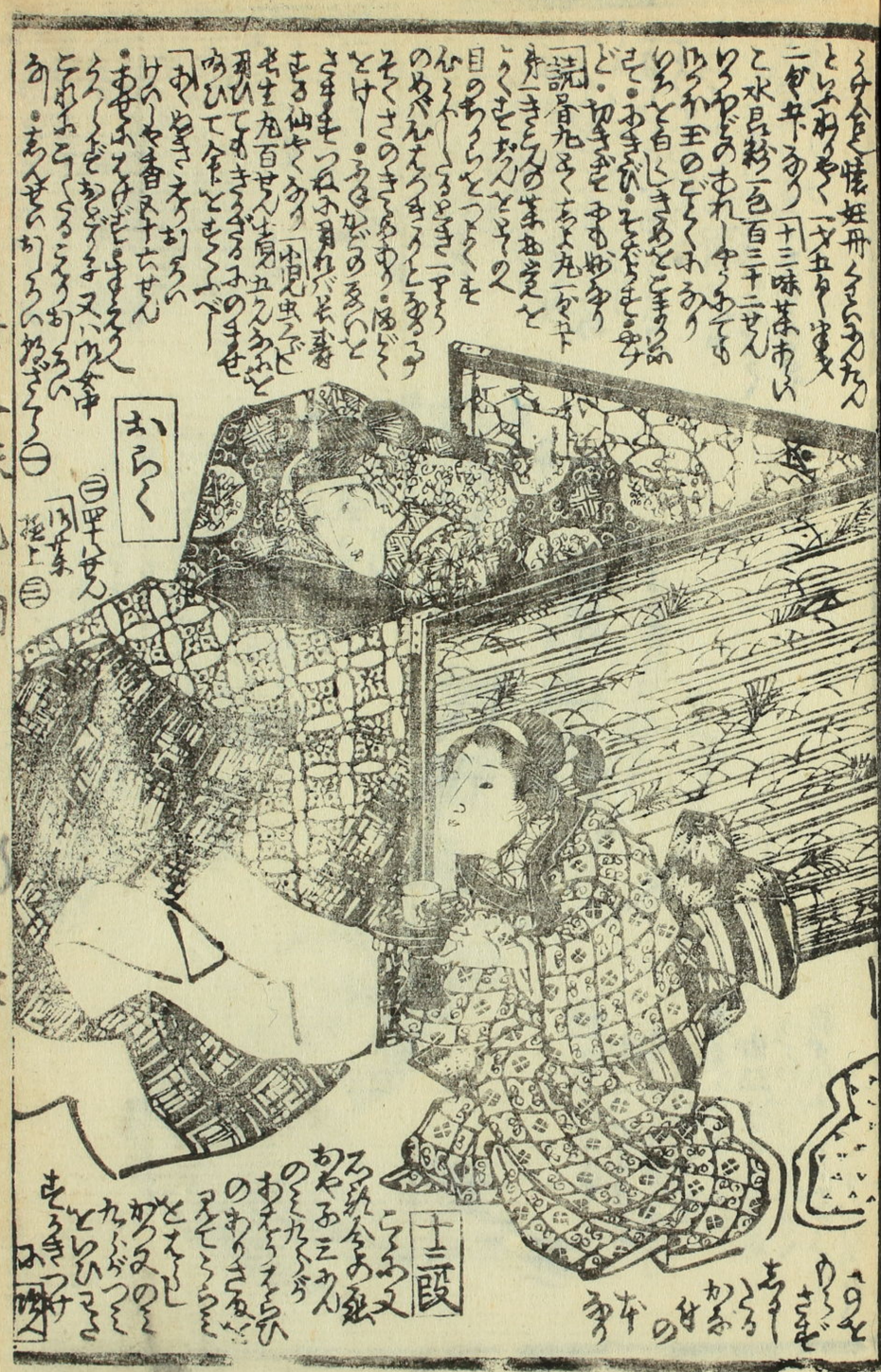
あきこいひこけ
ちこかきに
黒こと
こぐこ
ちこ
ここ
このこ
ぐこ
こホ
こぐ
ここ
こて
㊅

のこ丸郎
知真坊
其二
福寿成

妙心
知真
のこんかう

其二

志ゞ山志ゞう
ちゞう母


おらく
十二段

つぎ　さてうとあぎるうをかきちらしとあるあそ
ちらくがあくまうも
きくけはびきをそりあや
るもよろこびけり
さてあらくいろをた
たのやろれあまとのを
あくまどたろとものの
ちくあくあ孝しんと
つしれバかちう
ふとものもろある
りのあらくとれも
ざるくあくようの
ふかとあけはバ
けるひろうろ多く
きとく星の井ぎく
四郎きくくとうしらづ
うらてあらくへ者ろろの
ひわくびわりけり
▲さてばらうもあくさ
すうてあけのとう
あらくぶたらおび一月
らびそこ肖のあバ老ぐく
あんざえしとちろも男のをと
さうけり　㊀

㊁さらくハかの恵こてぶらしに秋いろあ
大中ろあそ恵二年ハ去のえんと
一三がんあまびくる一人あれども
恵ろくとうさくしのとろびれハ
たゞ一ぞ恵ゑ多のちたゞしろくく
恵ゑ今ろかる多とゑありけるあり
▲ゑまとろのちゑ今の恵
ちろくぞのをたろと
ふふろける一るゆ又ハ
あちぶれくる
岩ふあちゞゆ
かんどくく
ゆるさま
くるあちろ
あくをゞゆ
㊂

㊃又ハ大かき
ちんをうゞゆ
あどあもあゞろう
するハ十ゑんゆ
ちすしひきつゞき
出板はんれのあ
いちんろくれこく
ねゞひわりれわゞく
くくくく